

Eugen J. Pentiuć, *West Semitic Vocabulary  
in the Akkadian Texts from Emar.*  
(Harvard Semitic Studies 49. Winona Lake:  
Eisenbrauns, 2001. 23 cm, XVIII, 278)<sup>1)</sup>.

池 田 潤

本書は Eugen J. Pentiuć 氏が 1997 年に米国ハーバード大学に提出した学位論文 *Studies in the Emar Lexicon* の改訂版である<sup>2)</sup>。書名は変更されているが、コーパスと章構成は学位論文と同一である。改訂されたのは、おもに Introduction (pp. 1–18) と List of West Semitic Forms (pp. 199–204)<sup>3)</sup> である。Introduction は学位論文の 2 倍以上の分量となり、最近の情報を盛り込むことによって、エマルの考古 (第 1 節)、歴史 (第 2 節)、言語 (第 4 節) の全体像を簡潔にまとめている。第 3 節にはコーパス、第 5 節には方法論に関する説明がある。

第 6 節 (先行研究) に述べられているとおり、エマル文書に見られる西セム語の語彙全般に関しては、J. Huehnergard (1988), A. Tsukimoto (1989) および R. Zadok (1991) による研究があるが、いずれも予備的な報告にとどまっている。また、個々の語形については、エマルとその周辺で出土した文書の出版、コレクション、二次研究をおこなった学者<sup>4)</sup>によって論じられている。しかし、エマルで書かれたアッカド語文書に出てくる西セム語の語彙を体系的かつ包括的に扱った研究は存在せず、本書がそのニーズに応える著作となった。著者は、コーパス全体からアッカド語として説明のつかない語形をたんねんに拾い、先行研

---

1) 本稿でエマル文書を引用する際には、Pentiuć の用いる略号に従う。しかし、Pentiuć が扱っていない文書については、その文書が出版された文献の著者名と出版年の組み合わせによって引用する [e. g. Tsukimoto 1994]。原文との照合を容易にするため、その他の略号も基本的に Pentiuć に従うことにする。本稿の執筆に際して、Shlomo Izre'el および山田雅道の両氏から貴重な助言を賜った。ここに記して感謝したい。

2) 学位論文の一部 (11 の語彙項目) はすでに 1999 年に出版されている。

3) /qabbilu/ “receptacle, a vessel” (QBL) が新たに加えられ、/qumšī/ “fabrics, clothes” (QMŠ), /<sup>ʔ</sup>argābu/ “heap, mound” (RGB), /šahba/ “gray color” (ŠHB), /θūbi/ “to return” (θWB), /yiθθi<sup>c</sup>i/ “salvation, deliverance” (Yθ<sup>c</sup>) and /<sup>ʔ</sup>azamru/ “(a kind of tree)” (ZMR) が削除された。また、*a-bā-TI* [*Emar* 57: 1–3] の解釈が /<sup>c</sup>abāti/ “pledge” (<sup>c</sup>BṬ) から /<sup>c</sup>abādi/ “to make, to do” (<sup>c</sup>BD) へと変わっている。

4) 二次研究をおこなった学者は数多くいるが、とりわけ D. E. Fleming [1992, 2000] が重要である。

究からそれらに関するあらゆる情報を集めている。先行研究を批判的に検討し、またセム語、印欧語、その他の言語にわたって独自に語源の調査をおこなったうえで、144語が西セム語起源であるとの結論に達している。

本書はエマル文書を研究する者にとっては不可欠のツールであり、また今後、エマルの住民が話していた未知の言語（以下、エマル語とする）<sup>5)</sup>の解明に向けて重要な基礎資料となることはまちがいない。さらに、前2千年紀の北西セム語の語彙研究に対しても、著者の指導教員であるJ. Huehnergardに続く重要な貢献を果たしていると言える<sup>6)</sup>。しかし、見過ごすことのできない問題点もいくつかあるので、以下それらを指摘したいと思う。

## I 構成の問題

本書の本論は2部に分かれる。第1部（全186ページ）はアッカド語として説明のつかない語形のリストである。第2部（全44ページ）では、第1部で扱った語の中から144語を西セム語彙として同定し、これらの正書法、音韻、語形成を論じている。巻末には第1部に出てきたフリ語とヒッタイト語の語形の一覧表、文献表、索引が添えられている。この構成は学位論文の題目には合っているが、*West Semitic Vocabulary in the Akkadian Texts from Emar*という書名にはそぐわないと言える。この題目は西セム語彙だけを扱った書物を期待させるからである。西セム語以外の語彙（非標準的アッカド語、ヒッタイト語、フリ語、語源不明の語など）を第1部から削除し、巻末の付録にまわしていれば、構成と書名の不一致は避けられたと思われる。

## II コーパスの問題

10-11ページで著者はエマルとその周辺で出土した文書のタイプを分類している。その際、文書の出自（文書がどこで出土したかではなく、文書がどこで書かれたか）の重要性を強調し、Huehnergardがたてる出自の判断基準を採用している [pp. 13-14]。これは文書

5) Pentiuć の研究成果をもとに考えると、エマル語は北西セム語であると考えられる。*qVil-*型の名詞の複数を接尾辞だけでなく第2語根子音と第3語根子音の間に -a- を挿入することによって標示するのは北西セム語の特徴である [p. 244]。語頭の \*w が \*y にシフトするのも北西セム語の特徴である。エマルでは wa/e/i/u も ya/e/i/u もほとんど常に PI 記号によって書かれるため、このシフトを検証するのは困難だが、Pentiuć によるとこのシフトがエマル語で起こっていた形跡が認められるという [pp. 235-6]。北西セム語を特徴付ける言語的改新については、ABD, pp. 158-9 を参照。

6) Huehnergard 1987。これと並んで重要なもうひとつの貢献として、Sivan 1984 がある。

のジャンルによって出自を判断する理にかなった基準である。ところが、実際には著者はこの基準に厳密に従っていない。彼は、“letters naturally have different places of origin” [p. 14]あるいは“lexical and literary texts are in most cases copies of originals in Mesopotamia or elsewhere” [ibid.] と述べながら、手紙 [*Emar* 260 & 263] や語彙・ト占・文学テキスト [*Emar* 537–783] からの例を引いている。アッカド語として説明のつかない語形を語彙テキストから探す理由は 13 ページに述べられているが、その他のジャンルについては何の説明もなされていない。

また、本書のどこを見てもコーパスが明確に定義されていないという問題もある。文書の略号表 [pp. xiv–xv] を見れば、およそどの文書群がコーパスに含まれているかは想像できる。しかし、略号表に載っている文書群のうちコーパスから除外された文書があったのか、もしあったとすれば、なぜその文書を除外したのかを知る由はない。Westenholz 2000 をコーパスに含めなかった理由については注 67 [p. 10] に説明があるが、Arnaud 1992 が文献表にあがっているにもかかわらずコーパスに含まれていない理由は定かではない。コーパスを構成する文書のリストおよび各文書の出自を論じた詳細な注がないために、本書の価値がいくぶん減じられる結果となっているのが残念といえよう。

エマル以外の場所で書かれたと考えられる文書がコーパスに含まれているという点も看過できない。たとえば、*Emar* 31 はカルケミシュ王 Šahurunuwa の前で書かれている。*Emar* 18 はカルケミシュ王 Ini-Teššup の前で書かれ、同王の印が押してある。*Emar* 207 にも Ini-Teššup の印が押されている。これらの文書はカルケミシュで書かれたと考えられるため、本書のコーパスに含めるべきではない。同様に、カルケミシュ王子の前で書かれたり、彼らの印が押されている文書 [ASJ 12 3 and ASJ 14 46] についても慎重な判断を要する<sup>7)</sup>。さらに、ASJ 13, 32, 42, RE 69, 90 の 4 点は Tell Munbāqa で書かれたと考えられる<sup>8)</sup>。

おそらく Pentiuć が存在に気付かなかったために文献表からもれているエマル文書もある。それらは次の 7 枚の粘土板と 1 点の断片である。Watanabe 1987 (粘土板 1 点); Tsukimoto 1994 (粘土板 1 点); Owen 1995 (粘土板 1 点); Arnaud 1996, No. 1 (粘土板 1 点); Streck 1999, No. 4 (断片 1 点); Tsukimoto 1999 (粘土板 1 点); Streck 2000, No. 6–7 (粘土板 2 点)。

7) これらの文書はカルケミシュで書かれたか、エマルでカルケミシュの書記によって書かれた可能性が高い。Ikeda 1998a を参照。

8) Tell Munbāqa の古代名は Ekalte である。詳しくは、Mayer 2001: 7–8 を見よ。

## III 文献学的問題

本書には文書を出版した学者の翻字を無批判に使用しているケースが数多く見られる。たとえば、著者は71ページで *du-ug-gu<sub>8</sub>-rù* [*Emar* 144: 1] という語形を引用している。ところが、この粘土板のハンドコピー [*Msk* 731005, *Arnaud* 1985, I: 74] を見てみると、実際には *TU-ug-KU-rù* と書かれていることが分かる。したがって、*dù-ug-gu<sub>5</sub>-rù* と翻字すべきである。*du* は単なる誤植と思われるが、*gu<sub>8</sub>* はそうではない。明らかに *gu<sub>8</sub>* は *Arnaud* の翻字 [*Arnaud* 1986: 156] の誤りを *Pentiuć* が無批判に書き写したために起こったミスである<sup>9)</sup>。残念なことに、このミスは第2部にまで持ち越されている。たとえば、文字表 [p. 209] にも希少な音価のリスト [p. 214] にも *gu<sub>8</sub>* が登場する。また、エマルで西セム語の音素 /g/ の表示に KUM 記号を用いた証拠として *du-ug-gu<sub>8</sub>-rù* があげられている。

言語データの扱いに関しては、別の問題点もある。*Arnaud* 1986, 1988 に翻字・翻訳されている文書の中には古代に複写されているものも少なくない<sup>10)</sup>。その場合、*Arnaud* は複数の粘土板から単一の版を校訂し、校訂版の翻字・翻訳のみを出版している。校訂版は架空の文書であり、そのまま言語データとして用いることはできない。残念なことに、*Pentiuć* はこの点に十分な注意を払っていない<sup>11)</sup>。第1部の最初の見出し語を例にとると、そこには 1 UDU *ša-a-šu* 3 NINDA *a-ba-a* 30 NINDA *ra-qa-tu<sub>4</sub>*…… [*Emar* 388: 11–13] という例が出てくる [p. 19]。これは *Arnaud* の翻字そのままであるが、*Arnaud* による *Emar* 388: 11 への注を見るか、ハンドコピーを確認すれば、NINDA *a-ba-a* は NINDA. MEŠ *e-bu-ù* [*Msk* 75280c], NINDA *bá-a* [*Msk* 74288], NINDA [ ] *a-ba-a* [*Msk* 731035 + 74316b]<sup>12)</sup>

9) *Arnaud* は *tu-ug-gu<sub>8</sub>-rù* と翻字する。*Pentiuć* はこの語の語根を  $\sqrt{DGR}$  と解釈するため、*du-ug-gu<sub>8</sub>-rù* に変更したのであろう。その際、*Pentiuć* は2つのミスを犯している。まず、*tu* を *dú* に変えるべきところを単に *t* を *d* に変えてしまった。次に、*Arnaud* の *gu<sub>8</sub>* (=KUM) を *gu<sub>5</sub>* (=KU) と訂正すべきだったのに、これを怠った。この種のミスはハンドコピーを確認すれば避けられる。なお、筆者がコレクションをおこなった結果、*gu<sub>5</sub>* という読みが正しいことが確認された。

10) 一例をあげると次の通りである。*Emar* 90 (証文), *Emar* 369 (NIN. DINGIR 即位式次第), *Emar* 373a (*zukru* 大祭次第), *Emar* 375a (*zukru* 例年祭次第), *Emar* 385a (*kissu* 祭次第)。*Arnaud* 1988 に出版された学術文書にも複写されたものが多い。*Emar* 90 については、*Ikeda* 1999: 175–176 を参照。なお、この論文には *Msk* 番号の誤植があるので、次の訂正を要する。*Msk* 74768 が 90a に、*Msk* 74733 が 90b に対応する。

11) *Pentiuć* がこの点にまったく注意を払っていないわけではない。たとえば、pp. 55, 61, 63, 78, 106, 112, 137, 138, 167, 169, 175, 185 には複写版への言及が見られる。しかし、文書によっては複写版をまったく考慮に入れていない。また、複写版に言及する場合に、その表示方法が一貫していない点も気になる。E. g. *Emar* 369: 38, text B [p. 55] vs. *Emar* 369: 10a [p. 106]。

という3つのテキストから復元されていることが分かる。3つ目の資料はPentiućの翻字と一見同一に見えるが、A記号の直前に破損があるため「e<sup>1</sup>-ba-a」と読む可能性も排除できない。この例が示すように、Pentiućが校訂版から引用するデータ、およびそれにもとづく言語学的分析は再検討を要する。

#### IV “West Semitic form” とは何か？

第2部は West Semitic Forms のリストで始まる [pp. 199–204] が、奇妙なことに本書では [West Semitic form] がきちんと定義されていない。その結果、このリストには、①エマル語の語基、②エマル語とは限らない西セム語の語基、③西セム語からアッカド語への借用語、④アッカド語として語形変化するエマル語の語根、⑤エマル語からの干渉を受けたアッカド語の語彙素、⑥これらの組み合わせが混在している。具体例を見る前に<sup>13)</sup>、基本的な用語を定義しておこう。語を論じる際には、まず語彙素と語形を区別する必要がある。前者は辞書を構成する抽象的な単位で、文法に応じてさまざまな形式をとって具現される。一方、語彙素がとる具体的な形式を語形と呼ぶ。たとえば、英語の語彙素 WRITE は文法に応じて *write, writes, wrote, written* 等の語形をとる。次に、語形の内部構造に関して、少なくとも語基と接辞<sup>14)</sup>という2つの要素を区別する必要がある。前者は自由形態素で、後者は拘束形態素である。セム語の場合、語基は語根 (root) と語型 (pattern) という2つの不連続要素によって構成される<sup>15)</sup>。

①エマル語の語基：144の語彙項目のうち、約半数はエマル語の語基とみなすことができる。これに該当するのは、地形<sup>16)</sup>、建築<sup>17)</sup>、職業・身分<sup>18)</sup>、神の名前や形容語句<sup>19)</sup>、祭りや

12) Msk 731035 + 74316b には 30 NINDA *ra-qa-tu<sub>4</sub>* ... の部分が欠けている。言い換えれば、Pentiućが引用したとおりの文は実在しないことになる。

13) 例は第1部で主たる見出し語となっているつづりに応じて引用する。

14) 接辞には派生接辞と屈折接辞の2種類がある。語基に派生接辞が付くと、新たな語彙素が形成される。屈折接辞は同一語彙素からさまざまな語形を生み出す役割を果たす。屈折接辞の付く語基は「語幹」とも呼ばれる。

15) 語彙素によっては語根と語型から成る内部構造を持たないものもある (e.g. Akk. *abu* 「父」)。そのような語彙素の語基を原始語基 (primitive base) と呼ぶ。

16) E.g. *am-qi* = /<sup>c</sup>amqi/ “valley,” *ga-ab-a* = /gab<sup>c</sup>a/ “hill,” *ḥu-ḥi-in-nu* = /ḥōḥinnu/ “corridor, passageway,” *na-aḥ-li* = /naḥli/ “ravine, wadi.”

17) E.g. *dú-gu-ra* = /duggūra/ “(a type of building),” *ḥa-ab-la* = /ḥabla/ “lot, portion, (a type of building),” *ḥi-id-ru* = /ḥidru/ “yard, room.”

18) E.g. *kā-ma-ri* = /kamari/ “priests,” *mu<sub>4</sub>-pa-li-la*, = /mupallila/ “arbitrator, mediator,” *šar-ru* = /šarrū/ “officials, rulers,” *ša-ra-ri* = /šarrāri/ “rival, spouse other than the first one,” *ma-aš-ar-tu<sub>4</sub>* = /maθ<sup>c</sup>artu/ “(a priestess),” *Pl-ra-ša* = /w/yarrāθu/ “heir, inheritor.”

19) E.g. *i-la-i* = /<sup>2</sup>ilāhi/ “gods,” *ga-ad-dā* = /gadda/ “fortune; a DN,” *qi-na-i* = /qina<sup>2</sup>i/ “zeal, ↗

月の名称<sup>20)</sup>, 農産物<sup>21)</sup>, 動物<sup>22)</sup>, 食物<sup>23)</sup>, 容器・道具<sup>24)</sup>, 度量衡<sup>25)</sup>に関するローカルな用語である。筆者は著者が提案する語源解釈をすべて受け入れるわけではないが、この種の単語は地元の言語から入り込む可能性が高く、アッカド語、ヒッタイト語、フリ語として説明がつかないものについてはエマル語の語基であると考えるのが自然である。しかし、これらの語基に付加される接辞もエマル語のものと考えする必要はない。一般に語基の借用は容易に起こるが、機能形態素の借用はまれである。文書がアッカド語で書かれているため、接辞は(母語から多少の干渉はあっても)基本的にはアッカド語とみなすべきである。ただし、中間言語<sup>26)</sup>に特有の現象は起こっても不思議はない。したがって、たとえば異形態の単純化が見られる場合、それが母語からの干渉なのか、中間言語的特徴なのかを慎重に見極める必要がある。

②エマル語とは限らない西セム語の語基: e. g. *ki-in-na-ru* = /kinnāru/ “lyre,” *ma-aṣ-ḥa-ra-ta* = /maṣḡarāta/ “youth, childhood”<sup>27)</sup>, *ḥur-ḥu-ru* = /ḥurḥuru/ “fatigue, weakness.” いずれの例も語彙テキストの語釈である。著者自身が認めるように、語彙テキストは「多くの場合、メソポタミアか別の場所で書かれた原本の写し」[p. 14]である。それにもかかわらず著者が「奇妙な音訳」を引用するのは、それらが「シュメール表語文字をおそらく西セム語である現地語に翻訳したもの」と考えるからである [p. 13]。語彙テキストがどのような経路でエマルにもたらされたかが不明である以上、「奇妙な音訳」がシリアの別の町で書き加えられ、エマルの書記はそれを単に書き写したにすぎないという可能性を排除す

↙ ardor, jealousy,” <sup>d</sup>*ša-ag-ga-ar* = /šaggār/ “a DN, offspring?,” <sup>d</sup>*ša-aḥ-ri* = /šaḥri/ “dawn, a DN,” <sup>d</sup>*ia-a-mi* = /yammi/ “sea, a DN.”

20) E. g. <sup>ez</sup>*zu-uk-ra* = /ḏukra/ “remembrance, memorial,” <sup>hi</sup>*ia-ri* = /ḥiyāri/ “(a month/festival name?),” <sup>ez</sup>*ki-is-sà* = /kissa/ “chair, throne, (name of a festival),” *mar-za-ḥu* = /marzaḥu/ “symposium, a month name.”

21) E. g. *da-ag-na*<sup>1</sup>-[*ti*] = /dagnā(ti)/ “grain(s),” *za-ar-ḥa* = /ḏar<sup>c</sup>a/ “(a kind of flour),” <sup>hi</sup>*i-ṭi* = /ḥiṭṭi/ “wheat.”

22) E. g. *id-ri* = /<sup>c</sup>idri/ “flock, herd,” *ba-qa-ra* = /baqara/ “flock, herd, bovines,” *ṣu-pá-ra-ti* = /ṣuparāti/ “goats.”

23) E. g. *ḥa-zé-ti* = /ḥaḏēti/ “breasts (of animal),” *ḥu-kà* = /ḥukka/ “(a kind of bread),” *ḥa-am-ra* = /ḥamra/ “wine,” *ka-ak-ka-ri* = /kakkari/ “talent, loaf of bread,” *ra-ba-tu*<sub>4</sub> = /rabbatu/ “(a kind of bread),” *ru-qa-nu* = /ruqqānu/ “thin cake, waffle.”

24) E. g. *a-na-ti* = /<sup>p</sup>anāti/ “(a kind of vessel),” <sup>hi</sup>*is-si-pu* = /ḥissipu/ “(a clay vessel),” *qu-bá-ḥu* = /qubba<sup>c</sup>u/ “(a container),” *qá-ṭi-nu* = /qaṭinnu/ “(an object/implement),” *ṣa-tù* = /ṣā<sup>c</sup>tu/ “(a vessel).”

25) E. g. *ma-ta-ḥu* = /mataḥu/ “(unit of measurement).”

26) 中間言語とは第2言語の学習者が運用する学習対象言語を指す。詳しくは、Selinker 1992を参照。

27) Pentiućも指摘するとおり [p. 116], この語形はアッカド語の *meṣḥerātu* 「若いころ, 子供のころ」の異形である可能性もある。しかし、この語が西セム語の限定・関係詞 *zu* の直後に現れるため、西セム語の可能性が高いと言えよう。

ることができない。

③西セム語からアッカド語への借用語：e. g. *di-bi-ra* “calamity, pestilence,” *hu-up-šu* “free men, countrymen,” *na-lu*<sup>1</sup> “roe deer.” これらの語彙素はメソポタミア本土のアッカド語でも用いられる [AHw, pp. 168, 357 and 725]。西セム語起源ではあれ、あくまでアッカド語の語彙素とみなすべきである。エマルの書記がこれらの語を用いているからといって、同じ語がエマル語の辞書に存在したとは限らない。

④アッカド語として語形変化するエマル語の語根：e. g. *i-ḥa-da-qà* “he surrounds” (HDQ II) [Akk. G durative 3. m. s.], *i-ḥa-mi-is* “he will oppress” (HMS) [Akk. G durative 3. m. s.], *ù-ma-ri-ir* “he confirmed” (MRR) [Akk. D preterite 3. m. s.], *ma-al-lu-ki* “installation, enthronement” (MLK) [Assyr. D inf.]<sup>28)</sup>。これらの語形は西セム語の語根とアッカド語の語型・屈折接辞によって構成されている。書記は母語から語根を借用し、アッカド語の動詞や動名詞として語形変化させたものと思われる。そのため、これらの語形にもとづいてエマル語の語形成を論じるのは方法論的に不適切であると筆者は考える。同じことが *a-bá-di* “to make, to do” (<sup>c</sup>BD) [Akk. G inf.] のように西セム語ともアッカド語ともとれる語型をもつデータにも当てはまる。*a-bá-di* はエマル語の語形であるかもしれない [Pentiuć の見解, p. 248] が、筆者は2つの理由からエマル語の語根がアッカド語として語形変化したものだとして解釈する。まず、このデータが現れる文書は基本的にアッカド語で書かれているため、なるべくアッカド語として解釈するのが自然である<sup>29)</sup>。次に、*a-bá-di* の場合、不定詞に先行する前置詞はアッカド語の *ana* である。

⑤エマル語からの干渉を受けたアッカド語の語彙素：*a-zi-ib-tu* “abandoned, divorced” [Akk. *ezibtu* に相当]、<sup>16</sup>*za-bi-ḥu* “sacrificer” [Akk. *tābiḥu* に相当] (音韻的干渉)；*ú-za-ar-ru-ú* “they scatter” [D<sup>30)</sup> durative 3. m. p.]、*mi-ti* “dead, family ancestors” [Akk. *mitūti* に相当] (形態的干渉)；*a-šar* “who, which” [Akk. “where, while”] (統語的干渉)；*lu-ú-na-ab-bi* “I may call upon” [D<sup>31)</sup> precative 1. c. s.] (意味的干渉)。これらの干渉例はエマル語に関して多くを語ってくれるが、これらの語彙素自体がアッカド語であるため第2部から除外すべきである。

⑥上記①～⑤の組み合わせ：e. g. *tu-ri-iš* “may she inherit” (W/YRθ) [G jussive 3. f.

28) Sivan [1984: 178] や Huehnergard [1987: 321] によると、この時期の西セム語の D 語幹不定詞はおそらく *quttālu* という語型を持っていた。したがって、*malluk-* は西セム語の D 語幹不定詞ではなく、アッシリア語の D 語幹不定詞だと考えられる。

29) エマルからは、(ウガリトのような) 現地語への訳語を含む多言語辞書も(カナン発信のアマルナ書簡のような) 現地語による語釈を含む行政文書も見つかっていない。したがって、エマル文書の中には機能形態素までエマル語であることが期待される文脈は存在しない。

30) アッカド語の *zarū* には D 語幹がない。

31) アッカド語の *nabū* (CAD *nabū* B) の D 語幹は「泣き叫ぶ、嘆く」という意味をもつ。

s.]. この例は *u-* で始まるアッカド語の語幹をもつ。それに対し、語根はエマル語で、屈折接辞 *t-*<sup>32)</sup> と間接命令法<sup>33)</sup> にもエマル語からの干渉が見られる。

以上の議論から分かるように、アッカド語文書に現れる西セム語の要素にはさまざまなタイプがあり、“West Semitic form” とひとくくりにするのは乱暴であると言わざるを得ない。

## V その他のコメント

p. xvii /roman/phonemic representation (下から7行目) —— セム祖語の音素のうちどれがエマル語において保持されているかに関する議論が本書にはまったくないため、エマル語の音素表示をおこなうことは不可能である。厳密に言うと、本書における /roman/ はセム祖語の音素を用いて再構したエマル語彙を表示している。

p. 1 下から9行目: Anzu→Azu.

pp. 1-2 Pentiuć は第1節において1996年に始まったシリア隊とドイツ隊による合同発掘に言及していない<sup>34)</sup>。この発掘により多くの新しい事実が明るみに出たが、中でも重要なのはフランス隊が発掘したLBの層の下に前3千年紀の町が存在するという発見であろう。

p. 5 本書の出版後にエマルの印章に関する詳細な報告書が出ている。D. Beyer, *Emar IV: Les sceaux*, Mission archéologique de Meskéné-Emar, Recherches au pays d'Ashtata, Freiburg/Göttingen: Universitätsverlag/Vandenhoeck und Ruprecht, 2001.

p. 8-9 エマルの行政文書の編年に関しては、A. Skaist 1998によって根本的な見直し提案されている。

p. 10 3行目: Brinkmanの最新の計算によると、バビロンのMelišipakの第2年は前1187年ではなく前1185年となる [Beckman 1996: 34]。

p. 12 筆者としては、カナン発信のアマルナ書簡の言語を“the southern variety of Western Peripheral Akkadian”と呼ぶのには賛成できない。この言語の位置づ

32) この接頭辞はアッシリア語起源の可能性もある。

33) *tu-ri-iš* [*Emar* 185: 13] には *lū* が先行していない。アッカド語の希求法は *lū* を要するため、*tu-ri-iš* が間接命令法のニュアンスをもつのは母語の干渉によるものと思われる。しかし、これが先史アッカド語の特徴を保持している可能性も排除できない。詳しくは、Izre'el 1991, I: 231-236を参照。

34) 詳しくは、Finkbeiner and Leisten 1999-2000を見よ。この報告書はPentiućが本書の執筆を終えたあとに出ているが、少なくとも新たな発掘が進行中であった事実には言及することはできなかったはずである。



- けについては、池田 1992 を参照。
- n. 75 — 宗教文書はエマルで作文されているが、文学テキストはそうではない。したがって、両者は明確に区別すべきであり、同一の範疇 (lit.) に入れてしまうのには問題がある。
- p. 13 “the basis of Emar Akkadian is Middle Babylonian” (25 行目) — エマルには粘土板の書き方にシリア型とシリア・ヒッタイト型という 2 つのタイプがある [p. 10]。後者は中期バビロニア語ベースと言ってもよいが、前者の字体と言語は基本的に古バビロニア語である。詳しくは、Ikeda 1999 を参照。
- p. 19 /abaya/ はエマルの書記法では *a-ba-ia* と書くのが自然であり、*a-ba-a* というつづりを /abaya/ と読むべき根拠はない。さらに、上でも述べたように、この箇所は NINDA 「e」-*ba-a* と読むことも可能である。
- p. 22 “ultraheavy vowel” (27 行目) — “ultraheavy” は音節を分類する用語であり [Huehnergard 2000: 4], 母音に対して用いるべきではない。
- p. 26 “core Akk.” (11 行目) — Core Akkadian (メソポタミア本土で話されたり書かれたりしたアッカド語, cf. Izre’el 1991, II: 198) はアッシリア学における標準的な用語ではないので、本書中のどこかで定義する必要がある。
- pp. 28–9 *a-šar* — アッカド語の *ašar* もヘブライ語の  $\text{אֲשֶׁר}$  もセム祖語の \* $\text{aθr-}$  “place” から派生している。したがって、この単語の語根は  $\text{ŠR}$  ではなく  $\text{θR}$  とすべきである。
- p. 34 下から 11 行目 [Emar 213: 6–7]: *mu-ti-ia* → *mu-ti<sub>4</sub>-ia*
- p. 46 10 行目 [Emar 82: 2]: ll. 8. 13 → ll. 8–9 (l. 13 は復元)  
22 行目 [AuOrS<sub>1</sub> 5: 1]: *dú-ug-gu<sub>8</sub>-rù* → *dú-ug-gu-rù*  
24 行目 [Emar 138: 26]: *du<sub>4</sub>-gu<sup>?</sup>-ra<sup>?</sup>* → *du<sub>4</sub>-gu-ru* (筆者のコレクションによる)
- p. 51 21 行目 [Emar 207: 34–36]: *gam-mu-ru* → *gám-mu-ru* [Durand 1990: 73]
- p. 54 下から 8 行目: *É-ti* → *É-ti*  
下から 7 行目: ASJ 12 7: 3 → ASJ 12 7: 13
- p. 67 7 行目: *hi-id-qu* の直後に GUŠKIN を挿入し、訳も “one golden h” と直す。  
12 行目 [RE 9: 5]: *hi-id-ru* → *hi-id-rù*
- p. 71 12 行目 [Emar 144: 1]: *du-ug-gu<sub>8</sub>-rù* → *dú-ug-gu<sub>5</sub>-rù*
- p. 96 5 行目および下から 16, 17 行目 [Emar 230: 6’]: *ku<sub>12</sub>-bu-[ru]* → *ku<sub>13</sub>-bu-[ru]*
- p. 105 8 行目 [Emar 369: 93]: 2 *ku-<sup>2</sup>u-ú* → 3 *ku-<sup>2</sup>u-ú* [Msk 74286a, l. 89], 3 *du<sub>8</sub>ku-<sup>2</sup>u-u* [Msk 74286a, l. 38’].
- p. 110 下から 11–12 行目 [Emar 213: 6–8]: *mu-ti-ia* ... *mím-mu-ia la-a i-ra-gu-*

- ma* → *mu-ti<sub>4</sub>-ia* ... *mim-mu-ia la-a i-ra-gu-mu*
- p. 115 1-3行目: *ma-am-rú* → *ma-QAR<sup>1</sup>-rú* (上述).
- p. 119 *ma-<sup>r</sup>i<sup>7</sup>-tu<sub>4</sub>* — Cf. Ug. *mhyt* “meadow” [Watson 2002: 11].
- p. 121 *ma-lik-ke-nu* — Fleming [2000: 207] はこれを *zu-ur-qi-<sup>r</sup>tu<sub>4</sub><sup>?</sup>* と読み替えることを提案する。同じ月名が RE 91: 35 にも出てくる [p. 198]。
- p. 129 下から 15 行目 [ASJ 14 43: 4]: A.ŠÀ → A.ŠÀ.MÉŠ
- p. 137 *PA-a-lu* — Cf. Ug. *pil* “(some type of grain)” [Watson 2002: 11].
- p. 139 *PI-ra-ša* — D. Arnaud 1995: 21-26 を見よ。
- p. 143 14 行目 [Emar 142: 1]: *ši-ip-hu* → *ši-ip-hu*
- p. 149 20, 21, 22, 25 行目: *qi-na-ti* → *qi-na-ti*
- p. 152 下から 5 行目: *Emar 457: 7'* → *Emar 467: 7'*
- p. 161 *ša-ra-ri* — 本書で扱わなかった文書に次のような例がある: *ar-ki SAR-ra-ri ta-ša-ab-bat* [ASJ 16, 1. 19-20]<sup>35)</sup>。SAR 記号には /sar/ ないし /zar/ という音価がなく、この文字を /sar/ ないし /zar/ と読むには *šar<sub>x</sub>* や *zar<sub>x</sub>* といった新音価を想定する必要がある。この事実は *sar-ra-ri*<sup>36)</sup> という読みを支持し、さらに <sup>16</sup>*ZA-ra-ri* も <sup>16</sup>*ša-ra-ri* (Pentiuć の見解) ではなく <sup>16</sup>*sà-ra-ri* と読まれていたことを示唆する。語源解釈についても、西セム語の *šarrāru* (Pentiuć 説) よりアッカド語の *sarrāru* (月本説) の可能性が高くなる。
- p. 163 19 行目 [Emar 213: 24]: *ši-iḫ-li* → *ši-i<sup>2</sup>-li* [Durand 1990: 73]<sup>37)</sup>
- 下から 7 行目 [Sigrist, “Seven Tablets,” 6: 2]: *i-na x Ê-ti* はおそらく *i-na u<sub>4</sub>-ma<sup>1</sup>-ti* [cf. AuOrS<sub>1</sub> 87: 1] と読むことができる。
- p. 165 *ša-a-i* — Cf. Ug. *šiy* “raptor” [Watson 2002: 11].
- p. 174 *šu-ur-me* — Cf. Ug. *trmt* “vianda” [Watson 2002: 14].
- p. 176 6 行目 [Emar 369: 48]: *ta-ad-na-ti* → *tá-ad-na-ti* [Msk 731027, 1. 48], *ta-ad-na-ti* [Msk 731042, 1. 37].
- p. 177 *ta-kil* — Arnaud のハンドコピーを見ると、2 番目の文字は GIL よりも NAM に見える。他の類似表現も考慮に入れ、Yamada [1995: 310] は *ta-⟨laq⟩-qè<sup>1</sup>*

35) 月本昭男氏が指摘するように [p. 234], *arki sarrāri šabātum* は新出の表現である。月本氏はこれが *arki sarrāri alāku* (passim) と同じ意味を表すと考えて “follows after a stranger” と訳すが、動詞を N 語幹の *taššabbat* とみなし, “(if) she is seized (being) after a s.” と訳すことも可能であろう。

36) /šarrāri/ ならば, *šár* (ZUR) という音価が用いられていたものと思われる。*šár* はエマルでよく用いられる音価である。

37) したがって, この例は「エマルでアインが H 記号によって表記された」[p. 218 も参照] 証拠にはならない。

- という読み替えを提案する<sup>38)</sup>。
- p. 183 14 行目 [Emar 185: 13]: <sup>f</sup>at-te-ia → <sup>m</sup>f<sup>f</sup>at-te-ia
- p. 193 4 行目 [JCS 40 2: 2]: KI. KÁ<sup>39)</sup> ma-la ma-[šú-ú A]Š UŠ? ... → KI. KÁ ma-la ma-[šú-ú] 「i<sup>7</sup>-na <sup>u</sup>ú-ri<sup>ki</sup> [Tsukimoto 1990: 185]
- p. 199 筆者の学位論文（未出版）はエマル王室に言及する行政文書のみを扱った研究である。他のサブコーパスについては、別稿で報告をおこなっている [Ikeda 1997, 1998b]。Seminara 1998 はより多くの文書をカバーしている。
- p. 200 <sup>c</sup>BD — <sup>c</sup>BY の上の行に移動する。
- p. 201 𒄀RD — “alerted” という訳語はアッカド語の *ḫarādu* にもとづくため [p. 57], このデータは第2部 [pp. 208, 219, 221] から削除すべきである。
- p. 205 Orthography — アッカド語を書くための正書法はエマルにも存在した。しかし、エマル語の語彙を書くための正書法はなかったのではないだろうか。筆者の考えでは、エマルにはアッカド語を上位変種、エマル語を下位変種とするダイグロシヤが存在した。このような状況下では下位変種が書かれることはなく、したがって下位変種の正書法は存在しないのが通例である。この想定はエマル語の語彙を書く際につづりのバリエーションが大きい<sup>40)</sup>という事実によっても支持されよう。
- p. 207 5 行目：ここに *a-bá-di* /<sup>c</sup>abādi/ を加える。  
85 GI — *qi* という音価を加え、データとして *qi-na-ti* = /qināti/ をあげる。
- p. 209 191 KUM — *gu*<sub>8</sub> という音価とその用例を削除する。
- p. 212 398 AH — *št-iḫ-li* = /ši<sup>c</sup>li/ という用例を削除する。  
461 KI — *qi-na-ti* = /qināti/ という用例を削除する。
- p. 215 4. The use of CVC signs — CVC タイプの音価の使用は書記慣行によって違いがあるという事実に言及する必要がある。たとえば、M 1 神殿のト占師に関連した文書では王室に関連した文書よりも頻繁に CVC タイプの音価が用いられる。
- p. 218 21 行目：*št-iḫ-li* → *št-i<sup>7</sup>-li* [p. 163 参照]。

38) この読み替えを大筋で受け入れたうえで、筆者としては *ta-qè* “may he take” (jussive) と読む可能性を提案したい。この場合、*talqe* → *taqqe* という同化が起こっていることになる。この同化は北西セム語に特徴的な変化 [Garr 1985: 156–7 参照] である。

39) KI. KÁ は BLMJ 7: 9, 14, 19, 25 にも現れるため、KI. KA(L) の書き誤りとは考えられない。

40) E. g. *ninda<sub>h</sub>u-ku*, *ninda<sub>h</sub>u-ku<sub>8</sub>*, *ninda<sub>h</sub>u-uk-ku*, *ninda<sub>h</sub>u-uk-ku<sub>8</sub>*, *ninda<sub>h</sub>u-un-ku<sub>8</sub>*, *ninda<sub>h</sub>u-ki*, *ninda<sub>h</sub>u-uk-ki*, *ninda<sub>h</sub>u-uk-ki*, *ninda<sub>h</sub>u-kà* “(a kind of bread),” *dú-gu-ru*, *dú-gu-rù*, *dú-ug-gu<sub>5</sub>-rù*, *du<sub>4</sub>-gu-ru*, *dú-gu-ra*, *dú-gu-ri* “(a type of building).”

## 参考文献

- ABD: Freedman, D. N. et al. (eds.), *The Anchor Bible Dictionary*. Vol. 1–6. New York: Doubleday, 1992.
- Arnaud, D. (1985) *Recherches au Pays d' Aštata—Emar VI*. Tomes 1–2. Textes Sumériens et Accadiens: Planches. Paris.
- Arnaud, D. (1986) *Recherches au Pays d' Aštata—Emar VI*. Tome 3. Textes Sumériens et Accadiens: Texte. Paris.
- Arnaud, D. (1988) *Recherches au Pays d' Aštata—Emar VI*. Tome 4. Textes Sumériens et Accadiens: Texte additionnel. Paris.
- Arnaud, D. (1992) Tablettes de genres divers du moyen-Euphrate, *Studi Micenei ed Egeo-Anatolici* 30, 195–245.
- Arnaud, D. (1995) Le vocabulaire de l'héritage dans les textes Syriens du moyen-Euphrate à la fin de l'âge du bronze récent, *Studi Epigrafici e linguistici* 12, 21–26
- Arnaud, D. (1996) Mariage et remariage des femmes chez les Syriens du Moyen-Euphrate, à l'âge du bronze récent d'après deux nouveaux documents, *Semitica* 46, 7–16 (Planche 1).
- Beckman, G. (1996) *Texts from the Vicinity of Emar in the Collection of Jonathan Rosen*. Padova.
- Durand, J.-M. (1990) Review of Arnaud 1985, 1986 and 1988. *RA* 84, 49–85.
- Finkbeiner, U. & T. Leisten (1999–2000) Emar & Balis 1996–1998: Preliminary Report of the Joint Syrian-German Excavations with Collaboration of Princeton University, *Berytus Archaeological Studies* 44, 5–57
- Fleming, D. E. (1992) *The Installation of Baal's High Priestess at Emar*, Atlanta: Scholars Press.
- Fleming, D. E. (2000) *Time at Emar: The Cultic Calendar and the Rituals from the Diviner's House*, Winona Lake: Eisenbrauns.
- Garr, W. R. (1985) *Dialect Geography of Syria-Palestine, 1000–586 B. C. E.* Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Huehnergard, J. (1987) *Ugaritic Vocabulary in Syllabic Transcription*. Harvard Semitic Studies 32. Atlanta: Scholars Press.
- Huehnergard, J. (1988) Northwest Semitic Vocabulary in Akkadian Texts from Emar, paper presented at the Annual Meeting of American Oriental Society. Chicago, March 1988.
- Huehnergard, J. (2000) *A Grammar of Akkadian*. Harvard Semitic Studies 45. Winona Lake: Eisenbrauns.
- 池田 潤 (1992) アマルナ語: 紀元前 2 千年期のビジン 『オリエント』 35/2, 1–21.
- Ikeda, J. (1997) The Akkadian Language of Emar: Texts Related to Ninurta and the Elders, *ASJ* 19, 83–112.

- Ikeda, J. (1998a) The Akkadian Language of Carchemish: Evidence from Emar and Its Vicinities, *ASJ* 20, 23–6.
- Ikeda, J. (1998b) The Akkadian Language of Emar: Texts Related to a Diviner's Family, *IOS* 18, 33–61.
- Ikeda, J. (1999) Scribes in Emar. In: K. Watanabe (ed.), *Priests and Officials in the Ancient Near East*, Heidelberg: Carl Winter, 163–185.
- Izre'el, Sh. (1991) *Amurru Akkadian: A Linguistic Study*. Vol. I–II. Atlanta: Scholars Press.
- Mayer, W. (2001) *Tall Munbāqa – Ekalte – II: Die Texte*. Saarbrücken.
- Owen, D. I. (1995) Passuri–Dagan and Ini–Teššup's Mother. In: Z. Zevit et al. (eds.), *Solving Riddles and Untying Knots. Biblical, Epigraphic, and Semitic Studies in Honor of Jonas C. Greenfield*, Winona Lake, 573–584.
- Pentiuć, E. J. (1999) West Semitic Terms in Akkadian Texts from Emar, *JNES* 58, 81–96.
- Selinker, L. (1972) Interlanguage, *International Review of Applied Linguistics* 10, 209–231.
- Seminara, S. (1998) *L'accadico di Emar*. Roma.
- Sivan, D. (1984) *Grammatical Analysis and Glossary of the Northwest Semitic Vocables in Akkadian Texts of the 15th–13th C. B. C. from Canaan and Syria*. AOAT 214. Kevelaer: Butzon und Bercker.
- Skaist, A. (1998) The Chronology of the Legal Texts from Emar, *ZA* 88, 45–71.
- Streck, M. P. (1999) Texte aus Münchener Sammlungen, *ZA* 89, 29–35.
- Streck, M. P. (2000) Keilschrifttexte aus Münchener Sammlungen, *ZA* 90, 263–280.
- Tsukimoto, A. (1989) Emar and the Old Testament: Preliminary Remarks, *Annual of the Japanese Biblical Institute* 15, 3–24.
- Tsukimoto, A. (1990) Akkadian Tablets in the Hirayama Collection (I), *ASJ* 12, 177–259.
- Tsukimoto, A. (1994) A Testamentary Document from Emar: Akkadian Tablets in the Hirayama Collection (IV), *ASJ* 16, 231–238.
- Tsukimoto, A. (1999) By the Hand of Madi–Dagan, the Scribe and *apkallu*–Priest: A Medical Text from the Middle Euphrates Region. In: K. Watanabe (ed.), *Priest and Officials in the Ancient Near East*, Heidelberg: Carl Winter, 188–200.
- Watanabe, K. (1987) Freiburger Vorläufer zu ḪAR–ra=*ḫubullu* XI und XII, *ASJ* 9, 277–291.
- Watson, W. G. E. (2002) Emar and Ugaritic, *NABU* 2002/1, 10–11.
- Westenholz, J. G. (2000) *Cuneiform Inscriptions in the Collection of the Bible Lands Museum Jerusalem: The Emar Tablets*. Groningen: Styx.
- Yamada, M. (1995) The Hittite Social Concept of 'Free' in the Light of the Emar Texts, *AoF* 22, 297–316.
- Zadok, R. (1991) Notes on West Semitic Material from Emar, *Annali dell'Istituto Universitario Orientale di Napoli* 51/2, 113–137.